

# 緑の種子

北原白秋

青空文庫



## 緑の種子

種子はこれ感覚の粹、

緑は金の陰影にして、幽かに泣くはわが心。

種子を哀しめ、よきひとよ、

冷たく、小さき芥子のたね、その一粒に心せよ、

戯けかし、日の光。

種子はこれ靈魂の粹、

生ける宝石、「時」の秒、金と緑の夜の秘密、  
淫慾の芽の潜伏所、  
オピウム  
阿片の精。

種子を哀しめ、よきひとよ、

緑は色の粹にして、

智慧と不思議と生滅の見えざる悲劇、  
ひやくめがね  
万華鏡。

消え去り難き幽霊の

芥子の緑に泣くごとく、

裏切したる歓会の醒めて哀しかなきわが心。

種子を哀しめ、よきひとよ、  
かな  
すすりな  
 戯すすりなけかし、日の光。

## 棗の樹

フィルム  
 映画の中に一本の棗なつめの樹あり。

以太利の街まちなれば日の光黄色なりけり。

四十五年八月

なつめ

棗には実ありき、その実いと赤かるべきも、  
ただ黄にかがやきて影を落せり。

急いそがしきシネマトグラフの中なれば、誰とわかねど突拍とつぺし子もなく  
現はれて気狂きちがひのごと

自転車乗の若紳士走り廻れり、  
何時いつまでも何時までも銀の輪の走り廻れり。

うしろに宝石商の飾かざり窓あり、舗石しきいしあり、樹の反射あり。

黒く優しき貴夫人も過ぎゆきにけり。

棗はかがやく。その男走り廻れば

愚かや乗れるその車輪しやりんふる慄へつつ縮まりてゆく。

悲しくわかき男かな、ワイシヤツに鼻眼鏡して、

突き当り、跳はねころべども起き直り、走り廻れり。

尻振りざまのをかしさよ、そのペタル縮まりて玩弄品おもちゃのごとく

今は早や踏むにも堪へね、ひたぶるに走り廻れり。

棗はかがやく。サンドウヰツチ売の爺おぢは驚く。

悪戯いたづら小僧こぞうは栗鼠りすのごと木にかけのぼる。

銀の輪は走り廻れり——ありとある、頓狂おどに戯けたれども、

ただにわが憂愁うれの外そとにのみ急いそがしく瞬またたきにけり。

フィルム  
映画の中に一本の棗の樹あり、

以太利の街なればその実いと黄色なりけり、

棗は光りき、されども影の影なればある甲斐もなく

見る人の心に耀かゞやきて、また倏たちまち忽たちまちに消え失うせにけり。

大正元年九月

人食ふひと

こはそもいづくの空なるや、  
はた何時なりや、誰なるや、  
人食ふ人ら背も矮く  
ひそと声せず、身じろがず。

蹲みて嗅ぐはなにごとか、  
はた、なになれば眼も狭く  
地の一点を凝視むらむ。  
銀鐘のごと日は光る。

青き波紋の刺青に

あくまで黒き頬は青く、

裸の腕うでに一枚の

皆かいしゆ朱ぬのの布をひきかつぐ。

悪しき心の真昼時

印度いんどたへま当麻の香の中に

笑まず狂はず、しんしんと

ひもじきごとし、泣くごとし。

血の悦楽にたましひの

ふかきうめきを忍ぶにか、

かつ現うつそみ身を悲かなしみ哀の  
糧かてと食むにか、さげすむか。

淫いんよく慾の肌うつくしく

時に緑蛇ぞ走りゆく、

息蒸すばかり恐ろしき

酷暑の光、葉の湿しめり。

悪しき神々しろしめす

印度いんどたへま当麻の真昼時、

すべて事なし、声もなく、

はたや、そよとの風もなし。

ペンギン

見知らぬ海と空とに

鳴いてゐる、鳴いてゐる、ペンギン、

なにを鳴くのか、ペンギン、

光と陰影かげの申子まをしご。

大正二年四月

冷たい氷のうへから

歌ふてくるペンギン、

なにを慕ふのか、ペンギン、

寂しい空のところに。

おそれも悔もない気ぶりで、

あるいてくる、ペンギン、

なにが楽しいのか、ペンギン、

大勢あつまつて、のんきに。

紺と白との燕尾服で、

ものおもふペンギン、

なにが悲しいのか、小意気な

わかい紳士のペンギン。

さらさら悲しい様子やうすも、

うれしさうにもない、ペンギン、

なにを慕ふのか、ペンギン、

幽かな空の光に。

四十五年五月

# 万年青

ほれ／＼と空に小鳥をとりにかし、

君涙して悲めどそれもせんや。

ひと鉢の万年青おもとすら、いまはその児に、

手をのべてこそ匍はひ寄りし君がその児に、

人妻ひとづまよ、二人ふたりしてふかく秘めたる赤き実も

遂しに知られて、あまつさへ、もぎりとらるゝ。

四十五年四月

## 悲みの奥

白く悲しく、かず数あまた

釣鐘の花咲きにけり。

緑こまかき神経の

悲しみの径、みち園の奥、

金の光にわけ入れば

アスパロガスの葉のかげに

涙はしじにふりそそぎ、

小鳥来鳴かず、君見えず、

空もめし盲ひしまひるどき真昼時、

白く悲しく、数<sup>かず</sup>あまた  
釣鐘の花咲きにけり。

四十五年五月

夕とどろき

春が逝く。……すたれは 廃果てたメトロポウルホテルに、  
やはらかな日の光る五時半、  
萎れた千鳥草と、石<sup>しゃぼん</sup> 鹼の泡のやうな  
白い小さな花をつけた雑草のなかを、

やつと五歳いっつのタアシヤアが押されてゆく、乳母車に載つて、

『銀ぎんだ、黄色だ、紅あかだ、緑だ、ようい………』

春が逝ゆく。……暖かな外光のなかを、

軽い小児の夏帽が光つてゆく、河の見える方へ、

さうして、支那人の老婦ばあやが後うしろから黙だまつて、

のんびりと、その車を押ししてゆくと、遠くで

意味のない叫びがきこえる、なつかしい五月のものの音ねが、

『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい………』

春が逝ゆく。……幽かに汗ばんで来た棕櫚の木と、

低く燻ぶつた檜の木の間から、

鉄柵を透いて道路が見え、白い蒸汽の檣が見える。

大河に恍惚とゆく帆船、短艇、煙、水面、

それらが揃つて日に蔭ると、何といふことなしに、

『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……』

春が逝く。……夏が来てさへ、一人の旅客も

もう訪ねて来る気色もない寂しさ。

みんな閉めきつた窓硝子の

ところどころに孔があいて、屋根にはいつのまにか

草が生へた……車から抱いて下ろすと、

坊やのリンネルの薔薇いろがかがやく。

『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、よい……』

春が逝く。……外廊の古びた円い石柱に、

その蔭に坐つてゐる、支那の老婦が

黒い繻子の服の寂しさ……タアシヤーは地面の

雑草の花をつまんで揉む、さも無心に。

さうして春が暮れてゆく、月島の方から、何といふことなしに  
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、よい……』

四十五年五月

## 石竹

障子閉めても、石竹の

花は出窓にいと赤し、

障子閉めつつ、自墮落じだらくに

二人並んで寝そべれど、  
ふたり

花はしみじみ、まだ赤し。

愚かなる花、小ちさき石竹。

四十五年五月

## 屋根の風見

子を奪<sup>と</sup>ろ、子奪<sup>と</sup>ろ、

鴻の巣の窓に

硝子が光る。

露西亞のサモワル、紅茶の息に

かつかと光る。

江戸橋、荒布橋。

青い燈<sup>ひ</sup>が点<sup>つ</sup>く……向うの屋根に

株の風見<sup>かざみ</sup>がくるくるまはる。

晴か、曇りか、霽か、雪か、  
 雲はあかるし、夕日は寒し、  
ななつ たな  
 七歳お店の長松さへも  
 黒い前掛ちよいとしめて、  
 空を見上げちやまじめがほ真面目顔、  
まじめがほ  
 真面目顔。

## 初冬のわかれ

四十四年十一月

冷えてあかるき園の中、  
ひ  
うち

ただに噴水ぞゆらぐなる。  
ふき

夏の記憶のなほ白き

楕円の、菱の花畑  
はな  
ぼたけ

なべてすがれて日も入りぬ。

けふの小徑にわかるれば  
こみち

紅さるびあの花老けし、  
べに  
ふ

あとに陋しく笑ふなり、  
さも

色情狂の前髪の  
いろ  
きちがひ

花かんざしを見るごとく。

枯れくさの香かに、夜のかげに

弱き児猫も匍はひめぐる。

すべて死したる同胞はらからの

耳のあたりに目をよせて

鳴くもさみしや、針芝に。

冷えてあかるき園うちの中

空に噴水ふきるぞゆらぐなる。

白雪のごと、玻璃のごと、

君が消えたる襟巻の

鳥の羽はねよりなほ白く。

四十四年十一月

## 黒ダリヤ

烏羽玉うばたまの黒きダリヤを胸にあて

カトリコ  
加特力の尼はなにをかゆめむらむ。

つつのぼうし  
角帽子雪かとはかりわななけど、

声さへ立てず、  
ええめろうど緑玉、  
いいき息をひそめし瞳こそ

ししやうれい精靈の日本の秋の  
すすゝりなき啜泣  
吸す吸ひ取る如し、  
泣く如し。

片恋かたこひの清きうれひに泣く人よ。

煩惱ぼんなうの塵うち払ひ、しづくくと入日のかたに歩みつゝ、

冷やかに尼あまのごとくも涙せよ。

紅べにびろうどのいと黒き

つやくくと胸のあたりに光るとき。

四十四年十月

## 春を待つ間に

種子たねを蒔け種子を、

葡萄の種子を。

畑を耩け、畑を、

からすむぎ  
燕 麦 の畑を。

生めよ、殖ふえよ、地に満てよ。

かな  
哀しきものは踊れよ。

新らしき子らの世継よつぎの

饗宴の春を待つ間に。

四十四年十一月

# 青空文庫情報

底本：「白秋全集 3」岩波書店

1985（昭和60）年5月7日発行

底本の親本：「雪と花火」東雲堂書店

1916（大正5）年7月1日

初出：緑の種子「朱戀 2巻9号」

1912（大正元）年9月1日

棗の樹「白樺 3巻10号」

1912（大正元）年10月1日

人食ふひと「朱戀 3巻4号」

1913 (大正2) 年4月1日

ペンギン「朱欒 2巻6号」

1912 (明治45) 年6月1日

悲みの奥「朱欒 2巻6号」

1912 (明治45) 年6月1日

夕とごろき「朱欒 2巻6号」

1912 (明治45) 年6月1日

石竹「朱欒 2巻6号」

1912 (明治45) 年6月1日

屋根の風見「朱欒 1巻2号」

1911 (明治44) 年12月1日

初冬のわかれ「朱欒 Ⅰ巻2号」

1911（明治44）年12月1日

春を待つ間に「朱欒 Ⅰ巻2号」

1911（明治44）年12月1日

※「緑の種子」の初出時の表題は「種子（ラムボオ）」です。

※「夕とどろき」の初出時の表題は「外光」です。

※「……………」は「……………」で入力しました。

入力：岡村和彦

校正：フクポー

2017年4月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 緑の種子

北原白秋

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>